

保護者評定による子どもの社会的行動評価尺度の作成

立元真¹ 古川望子² 福島裕子³ 永友絵理²

The Development of CHILDREN'S SOCIAL BEHAVIOR RATING SCALE for Parent Administration

Shin TATSUMOTO, Misako FURUKAWA,
Hiroko FUKUSHIMA, Eri NAGATOMO

各国で研究がすすめられつつあるペアレント・トレーニングの試みは、その効果査定の一部として、子どもの行動傾向を評価している。たとえば、EybergらのPCITでは、ECBI (Eyberg, 1980) が子どもの行動傾向におよぼす介入効果の指標として用いられている (Hood & Eyberg, 2003)。また、破壊的な行動傾向とADHDの傾向を持つ就学前児にTriple Pのペアレント・トレーニングプログラムを行ったBor, Sanders, Markie-Dadds (2002) は、ECBIと電話による子どもの行動傾向の確認 (PDR; Chamberlain and Reid, 1987) による方法を用いている。同様に、Incredible YearsのBasic Parent Trainingのプログラムを行為問題をもつADHDの子どもに適用したJones, Daley, Hutchings, Bywater and Eames (2007) は、スクリーニング尺度として、ECBIとSDQ (Goodman, 1997; 問題行動の強度と困難性の質問紙) の下位尺度を用い、Conners尺度 (Conners, 1994) で効果査定を行っている。Chamberlain, Price, Leve, Laurent, Landsverk & Reid (2008) は、PDRのみで子どもの行動の評価を行っている。さらに、予防的な比較的軽いTriple Pの介入の効果を検討した、Turner & Sanders (2006) は、PDR, ECBIに加えて、家庭や地域の生活の中での子どもの問題行動の生じうる場面の数を指標とするHCPC (Sanders & Dadds, 1982) という行動尺度を用いている。

ECBIやHCPCは、ペアレント・トレーニングを含む様々な子どもへの臨床介入の際の事前査定や効果査定のために用いられている尺度である。いずれも、子どものさまざまな問題行動傾向を測定するために、問題行動が生じうる場面をあらかじめ想定し、それに合致する場面の数が指標の核となっている。そのため、多くの場面において不適切な行動の多い子どもにおいては問題行動の得点が高くなるが、不適切な行動が特定の場面に集中しがちな子どもについては、その感度が低くなることが想定できる。また、これらの尺度は、なんらかの問題の兆候をすでに示している子どもに対して用いられることが多いため、明確な子どもの行動傾向の特性があることが臨床上の基準として用いられるために、あえて感度が低くなるよう設定されてい

¹ 宮崎大学教育文化学部

² 宮崎大学医学部生殖発達医学講座

³ 宮崎大学教育学研究科, 宮崎大学教育文化学部附属幼稚園

る。

ペアレント・トレーニングの介入は、子育て支援を目的とした予防的介入から、顕在化してしまった問題行動に対処する治療的介入にわたるまで幅広い。このなかで、予防介入においては、子どもの不適切な行動の出現頻度は相対的に少なく、そのため、介入の効果を検討する時系列的な測定をおこなっても、尺度の感度が低いためにその効果を見出しにくい場合が予想される。そこで、本研究では、親評定による、予防的介入を視野においた、より感度の高い行動尺度を構成することを目的とする。

【方法】

調査対象

宮崎県内の幼稚園に3～6歳の子どもを通わせている母親550名、さらに、宮崎県内の保育所に3～6歳の子どもを通わせている母親472名の、計1022名に幼稚園または保育所を通して依頼し、質問紙への回答を得た。なお、3～6歳の範囲内にきょうだいがいる場合には、そのなかでより年少の子どもについて回答するよう求めた。

調査材料

親評定用社会的スキル尺度幼児版(中台, 1999)、子どもの行動チェックリスト(CBCL; Achenbach, 1991)、ADRD-RS (Dupaul, Power, Anastopoulos, Reid, 1998)の質問項目を参考にし、いったん71項目の質問項目群を作成して、宮崎県内の幼稚園の保護者299名、保育所の保護者287名の、計586名による評定を経て、保護者が日常生活の中で観察・評価しにくいために欠損値となる率が高かった32項目を削除し、39項目を調査材料とした。

各質問項目への回答の方法については、通常のリッカート法による評定に、工夫を加えた。日常、子どもの行動を専門的な立場で見ている幼稚園教諭や保育士、心理士などの専門的な立場にある者は、多くの子どもと接した経験から、相対的に子どもの行動傾向を評価することができる。ところが、一般の子どもの保護者にとっては、例えば、子どもがきょうだいと取っ組み合いの喧嘩をすることが週に1度程度あるならば、それを「頻度が高い」と評価するか「頻度が低い」と評価するかについては、非常に個人差が高くなる傾向がある。多くの子どもと接する機会や専門的な視点が少ないために、主観的に判断せざるをえないためであろう。リッカート法は、そもそも、明確な基準で割り切りにくい状況を、ある「特性にあてはまる」～「あてはまらない」のあてはまりの程度を得点化して示させ、その程度を多くのサンプルの平均値として扱うことで、評価者個々の主観による順序尺度データを、平均値として集計することによって、客観性をもたせ、比例尺度に格上げして用いる用法が多く用いられる。この段階で、おそらく、数理的な問題は生じているのであろうが、多くの場合それは無視されて用いられている。行動尺度としての実効性を重視するならば、行動の頻度を、例えば「日に1回以上」というようにあえて明示することによって、頻度に関する回答の揺れを減じることができれば、おそらく、行動尺度としての信頼性は増すであろうと考えられる。そこで、本研究で作成する尺度においては、各項目について、母親が日常の子どもの行動の頻度を明確にするために、1=まったくない、2=月に1回以上、3=週に1回以上、4=週に2・3回以上、5=日に1・2回、6=日に3回以上、7=日に5回以上の7件法で、親に評定するように求めることとした。

なお、質問紙を配布する際には、各家庭のプライバシーを保護するために、質問紙を封筒に入れて配布し、封筒に入れた状態で質問紙を回収した。

【結果と考察】

1022ケースの回答のうち、90%以上の項目に回答が記された計863ケースの回答を分析の対象とし、重み付けのない最小二乗法により因子を抽出した後、プロマックス回転による因子分析を行った。最小の固有値を1にして因子の抽出を行った後、因子の寄与の減少が他に比べ小さくなる地点で因子数を決定するスクリープロット図を検討した結果から、因子数を3因子(32項目)に決定して再分析を行った。その結果、「ポジティブな行動」「ネガティブな行動」「孤立的行動」の3因子を抽出した。

番号	項目内容	因子		
		ネガティブな行動	ポジティブな行動	孤立行動
27	衝動的に、じっくり考えないで行動する。	.690	-.097	.032
26	座っているべき時に、席を離れてしまう。	.666	-.114	-.040
23	じっとしていない、または何かに駆り立てられるように活動する。	.657	-.106	-.071
21	きちんとしていなければならない時に落ち着きがない。	.638	-.114	.118
11	他の子どもがしている遊びや活動のじゃまをする。	.617	.072	-.068
6	怒りの感情にまかせて人をたたいたり、つねったり、けったりする。	.595	-.013	-.110
22	集中力が長続きしない。	.558	-.129	.158
4	家族がしていることのじゃまをする。	.541	.050	.030
31	そわそわもじもじして、落ち着いていない。	.532	-.104	.260
3	怒りの感情にまかせて物を投げる。	.529	-.007	-.051
10	かんしゃくをおこす。	.516	-.023	.049
32	何かに夢中になって、周囲の他の物事に注意が向かなくなる。	.510	.047	.132
28	自分の持ち物を壊す。	.507	.022	.122
33	過度に走り回ったり、高いところによじ登ったりする。	.498	-.002	.058
19	つかみあいのケンカをする。	.483	.066	-.085
12	活動中に自分から友だちや同輩の手伝いをする。	.053	.666	-.012
37	友だちとのトラブルの際に、自分の気持ちをコントロールする。	-.009	.652	.021
17	家族のいい所を見つけ、ほめる。	.040	.635	.131
14	親に言われなくても、進んで手伝いをする。	-.164	.608	.228
5	友だちやきょうだいから嫌なことを言われても、適切に対応する。	.074	.599	-.036
38	家族と意見が対立したときには、自分の意見を変えて、折り合いをつける。	-.107	.591	.181
18	人と遊んでいる時にルールに従う。	-.101	.591	-.081
9	悪い点を指摘されても、素直に受け入れる。	-.081	.565	.063
2	決められたお手伝いをきちんと行う。	-.132	.550	.149
1	友だちやきょうだいに意地悪されても適切に対応する。	.120	.532	-.072
8	家にあるおもちゃや絵本などを片づける。	-.090	.515	.080
24	自分の衣服などを適切な場所にしまう。	-.097	.442	.115

孤立行動 ($\alpha = .710$)				
13	さびしそうにしている。	.080	.136	.593
29	活動的ではなく、動作がのろく、元気がない。	.005	.082	.547
15	悲しそうであったり、ふさぎこんだりする。	.126	.145	.544
20	極端に恐がり、あるいは心配する。	.150	.122	.432
30	イライラ、不機嫌である。	.263	-.020	.417
16	遊びや集団活動に参加する。	.258	.402	-.416
因子寄与		16.75	11.92	4.54

因子負荷量.40以上のもののみを掲載。

さらに、「ポジティブな行動」(10項目)と「ネガティブな行動」(15項目)の項目数が極端に多かった。因子の多次元性が想定されたため、「ポジティブな行動」を2因子、「ネガティブな行動」を2因子に決定し、再分析を行った。そして最終的に、「衝動的・多動的行動」、「攻撃的行動」、「協調的な適応行動」、「同輩とのトラブルにおける適切な対応」、「孤立行動」の5因子に決定した。その因子構造をTable 1, 2, 3に示す。

これら5つの因子に分類された31項目以外の8項目は、因子負荷量が小さい項目、共通性の低い項目や信頼性係数が下がってしまう項目であるなどの理由から尺度から除外した。

Table 2 因子構造 (ネガティブな行動)

番号	項目内容	因子	
		1	2
衝動的・多動的行動 ($\alpha = .875$)			
23	じっとしていない、または何かに駆り立てられるように活動する。	.770	-.030
21	きちんとしていなければならない時に落ち着きがない。	.747	.002
22	集中力が長続きしない。	.746	-.089
27	衝動的に、じっくり考えないで行動する。	.743	.013
31	そわそわもじもじして、落ち着いていない。	.697	-.022
26	座っているべき時に、席を離れてしまう。	.689	.012
32	何かに夢中になって、周囲の他の物事に注意が向かなくなる。	.550	.041
33	過度に走り回ったり、高いところによじ登ったりする。	.505	.060
28	自分の持ち物を壊す。	.409	.199
攻撃的行動 ($\alpha = .806$)			
6	怒りの感情にまかせて人をたたいたり、つねったり、けったりする。	-.070	.786
3	怒りの感情にまかせて物を投げる。	-.090	.755
19	つかみあいのケンカをする。	-.040	.607
10	かんしゃくをおこす。	.073	.567
4	家族がしていることのじゃまをする。	.167	.485
11	他の子どもがしている遊びや活動のじゃまをする。	.222	.476
因子寄与		35.50	8.37

因子負荷量.40以上のもののみを掲載。

Table 3 因子構造 (ポジティブな行動)

番号	項目内容	因子	
		1	2
協調的な適応行動 ($\alpha = .799$)			
14	親に言われなくても、進んで手伝いをする。	.785	-.138
24	自分の衣服などを適切な場所にしまう。	.637	-.173
8	家にあるおもちゃや絵本などを片づける。	.562	-.006
2	決められたお手伝いをきちんと行う。	.541	.062
17	家族のいい所を見つけ、ほめる。	.537	.136
12	活動中に自分から友だちや同輩の手伝いをする。	.512	.233
9	悪い点を指摘されても、素直に受け入れる。	.440	.181
同輩とのトラブルにおける適切な対応 ($\alpha = .826$)			
1	友だちやきょうだいに意地悪されても適切に対応する。	-.167	.872
5	友だちやきょうだいから嫌なことを言われても、適切に対応する。	-.080	.852
37	友だちとのトラブルの際に、自分の気持ちをコントロールする。	.229	.506
因子寄与		33.73	7.63

因子負荷量.40以上のもののみを掲載。

『衝動的・多動的行動』の因子 (9項目 $\alpha = .875$)

まず、最初の質問項目のグループは、「じっとしていない、または何かに駆り立てられるように活動する」、「きちんとしていなければならない時に落ち着きがない」、「集中力が長続きしない」、「衝動的に、じっくり考えないで行動する」、「そわそわもじもじして、落ち着いていない」、「座っているべき時に、席を離れてしまう」、「何かに夢中になって、周囲の他の物事に注意が向かなくなる」、「過度に走り回ったり、高いところによじ登ったりする」、「自分の持ち物を壊す」の9つの質問項目から構成されている。これらの項目は、自分の感情の赴くままに、動き回ったり、突発的に行動したりすることを示しているため、『衝動的・多動的行動』の因子と命名した。

『攻撃的行動』の因子 (6項目 $\alpha = .806$)

次の質問項目のグループは、「怒りの感情にまかせて人をたたいたり、つねったり、けつたりする」、「怒りの感情にまかせて物を投げる」、「つかみあいのケンカをする」、「かんしゃくをおこす」、「家族がしていることのじゃまをする」、「他の子どもがしている遊びや活動のじゃまをする」の6つの質問項目から構成されている。これらの質問項目は、自分の感情を抑えきれずに、人や物に激しく当たることを示しているため、『攻撃的行動』の因子と命名した。

『協調的な適応行動』の因子 (7項目 $\alpha = .799$)

次の質問項目グループは、「親に言われなくても、進んで手伝いをする」、「自分の衣服などを適切な場所にしまう」、「家にあるおもちゃや絵本などを片づける」、「決められたお手伝いをきちんと行う」、「家族のいい所を見つけ、ほめる」、「活動中に自分から友達や同輩の手伝いをする」、「悪い点を指摘されても、素直に受け入れる」の7つの質問項目から構成されている。これらの質問項目は、周りの人が喜ぶ行動をし、良い関係を築こうとすることを示しているため、『協調的な適応行動』の因子と命名した。

『同輩とのトラブルにおける適切な対応』の因子（3項目 $\alpha = .826$ ）

次の質問項目グループは、「友だちやきょうだいに意地悪されても適切に対応する」、「友だちやきょうだいから嫌なことを言われても、適切に対応する」、「友だちとのトラブルの際に、自分の気持ちをコントロールする」の3つの質問項目から構成されている。これらの質問項目は、その場に合わせて自分の気持ちや感情をコントロールし、周りの人と関わろうとすることを示しているため、『同輩とのトラブルにおける適切な対応』の因子と命名した。

『孤立行動』の因子（5項目 $\alpha = .710$ ）

最初の因子分析の第3因子として抽出された質問項目のグループは、「さびしそうにしている」、「活動的ではなく、動作がのろく、元気がない」、「悲しそうであったり、ふさぎこんだりする」、「極端に恐がり、あるいは心配する」、「イライラ、不機嫌である」、さらに、逆転項目としての「遊びや集団活動に参加する」の6つの質問項目から構成されている。これらの質問項目は、周りの人と関わることができずに1人であることを示しているため、『孤立行動』の因子と命名した。

因子間相関

5つの因子間の関係について相関係数を算出した。その相関関係をTable 4に示す。

Table 4 因子間の相関 (n=863)

	攻撃的	協調的	自己統制	孤立
衝動的・多動的行動	.514*	-.052	-.062	.418*
攻撃的行動		.030	.108*	.364*
協調的な適応行動			.485*	.066
同輩とのトラブルにおける適切な対応				.050

* $p < .05$

それぞれの因子同士の関係について検討してみると、『衝動的・多動的行動』と『攻撃的行動』、『孤立行動』との間の相関係数はそれぞれ、 $r = .514$ 、 $r = .418$ であり、『衝動的・多動的行動』の多い子どもは、『攻撃的行動』、『孤立行動』が多くなるという、正の相関が見られた。また、『攻撃的行動』と『孤立行動』との間の相関係数は、 $r = .364$ であり、『攻撃的行動』の多い子どもは、『孤立行動』が多くなるという、正の相関が見られた。衝動的・多動的な子どもは、その衝動的な傾向から他者に対して攻撃やあるいは攻撃とられてしまうような行動が多く、その結果として孤立してしまう事例が多いと考えられることから、この関係性は妥当であろう。

『協調的な適応行動』と『同輩とのトラブルにおける適切な対応』との間の相関係数は、 $r = .485$ であり、『協調的な適応行動』の多い子どもは、『同輩とのトラブルにおける適切な対応』が多くなるという、ほどほどの正の相関が見られた。『同輩とのトラブルにおける適切な対応』の行動項目はいずれもきょうだい間のトラブルに対する対処行動に関するものであり、『協調的な適応行動』は、家族内での適応全般に関する行動項目群からなっている。そのため、両者の相関関係が生じるのは至極当然の結果であるように思われる。なお、『同輩とのトラブルにおける適切な対応』の行動傾向の得点は、測定される子どもが一人っ子である場合には、その子どもの能力に関わらず、低い値になることには留意しておくべきであろう。

再検査信頼性

1ヶ月前の期間において、436名の母親に再度回答してもらった。そして、432名の有効回答者の因子ごとの合計点数について、1ヵ月前と現在の相関係数を算出した (Table 5 参照)。

Table 5 1カ月の期間をおいた再検査信頼性 (n=432)

1ヶ月前	現在	衝動的・多動的	攻撃的	協調的	自己統制	孤立
衝動的・多動的行動		.961**				
攻撃的行動			.919**			
協調的な適応行動				.924**		
同輩とのトラブルにおける適切な対応					.934**	
孤立行動						.919**

**p<.01

各尺度にわたって、1カ月の期間をおいての再検査の得点との中の相関は、.916～.961にわたり、高い相関を示した。すなわち、本行動尺度を構成する5つの下位因子は、通常特に変更することがない限りは1ヵ月程度の期間で大きく変化することのない、安定性をもつ尺度であることが示された。

外的基準との関連

Table 6 EybergのECBIの得点傾向の関連 (n=115)

	衝動多動	攻撃行動	孤立行動	協調的な適応	同輩とのトラブルにおける適切な対応
問題の程度得点	.588**	.570**	.433**	-.229*	-.140
問題行動得点	.472**	.382**	.412**	-.259**	-.159

**p<.01 *p<.05

本行動尺度の妥当性を証明するために、115名の3～6歳の幼児の母親に、子どもの臨床に際してよく用いられる、EybergのECBIと本行動尺度の同時測定を依頼し、相関関係を検討した。本行動尺度の、『衝動的・多動的行動』、『攻撃的行動』、『孤立行動』といった子どもの、あまり望ましくない行動傾向の得点は、ECBIの問題行動得点 (Proble) および問題の程度得点 (Intensity) との間に有意な正の相関を示した。また、子どものポジティブな行動特性である『協調的な適応行動』と、ECBIの問題行動得点および問題の程度得点との間には有意な負の相関が示された。一方で『同輩とのトラブルにおける適切な対応』と、ECBIとの間の相関係数は有意に達しなかった。これは、きょうだいの有無による評定結果の違いが、本行動尺度の『同輩とのトラブルにおける適切な対応』の感度を鈍らせていることによるものだと考えられる。

本行動尺度は、ペアレント・トレーニングなどの子どもの問題行動に対する臨床や予防的臨床活動の際に、問題行動傾向の有無や程度を測定し、事前のインタビュー時の査定として用いて臨床活動の方向性の決定の資料としたり、介入効果のチェックや評価のために複数回の査定を

行うことを前提としている。そこで、190名の母親に、養育スキル尺度 v2 (立元, 2005) との同時測定を依頼し、得られたデータをもとに相関係数を算出した (Table 7 参照)。

Table 7 母親の養育スキルと関連 (n=190)

	養育スキル尺度 v2 の下位因子				
	好ましい働きかけ	関心	話し合い	一貫性のないしつけ	罰
衝動的・多動的行動	-.196**	-.293**	-.303**	.309**	.390**
攻撃的行動	-.242**	-.230**	-.279**	.325**	.483**
孤立行動	-.129	-.166*	-.210**	.200**	.215**
協調的な適応行動	.283**	.188**	.233**	-.236**	-.239**
同輩とのトラブルにおける適切な対応	.146*	.177*	.112	-.184*	-.122

**p<.01

この結果、母親の望ましい養育スキルである、『好ましい働きかけ』のスキル得点が高いと、子どもの攻撃行動が少なく ($r=-.242$, $p<.01$), 逆に『協調的な適応行動』が有意に高くなる ($r=.283$, $p<.01$) ことが示された。また、母親の『関心』のスキル得点が高いと、子どもの『衝動的・多動的行動』 ($r=-.293$, $p<.01$) も、『攻撃的行動』 ($r=-.230$, $p<.01$) も少なくなることが示された。加えて、母親の『話し合い』のスキルが高いと、子どもの『衝動的・多動的行動』 ($r=-.303$, $p<.01$), 『攻撃的行動』 ($r=-.279$, $p<.01$), 『孤立行動』 ($r=-.210$, $p<.01$) といった行動傾向が低くなり、逆に、『協調的な適応行動』が有意に高くなる ($r=.233$, $p<.01$) ことが示された。

他方で、母親の望ましくないスキルである『一貫性のないしつけ』のスキル得点が高いと、子どもの『衝動的・多動的行動』 ($r=.309$, $p<.01$) も、『攻撃的行動』 ($r=.325$, $p<.01$) も、『孤立行動』 ($r=.200$, $p<.01$) のいずれも高まり、逆に、『協調的な適応行動』が少ないこと ($r=-.236$, $p<.01$) が明確に示された。また、母親の『罰』のスキル得点が高いと、子どもの『衝動的・多動的行動』 ($r=-.390$, $p<.01$) も、『攻撃的行動』 ($r=.483$, $p<.01$) も、『孤立行動』 ($r=.215$, $p<.01$) のいずれも高まり、逆に、『協調的な適応行動』が少ないこと ($r=-.239$, $p<.01$) が明確に示された。

母親のポジティブな養育スキルの得点が高いほど子どもの行動傾向に良好な影響を及ぼし、ネガティブな養育スキルの得点が高いと子どもの行動傾向に望ましくない影響を及ぼすという関係性が示された。母親の養育スキルと、本行動尺度で測定した子どもの行動傾向の間の相関関係は、理にかなった妥当なものであると考えられる。しかしながら、『同輩とのトラブルにおける適切な対応』については、相関関係は明確に示されなかった。これは、前述のように、きょうだいのいない子どもの測定の場合に評価があいまいになることが関係していると考えられる。

上記のように、31項目の行動傾向を7段階で評定し、『衝動的・多動的行動』、『攻撃的行動』、『協調的な適応行動』、『同輩とのトラブルにおける適切な対応』、『孤立行動』の5つの観点から測定する、行動傾向尺度を作成し、子どもの社会的行動評価尺度 (CSB-RS: Children's

Social Behavior Rating Scale) と命名した。CSB-RSは、高い内的一貫性をもち、妥当な因子間相関、高い再検査信頼性を示し、さらに、外的基準として用いたECBIや、本行動尺度の応用範囲と目されるペアレント・トレーニング介入に用いる養育スキル尺度との間に、妥当な関係性を示した。一方で、『同輩とのトラブルにおける適切な対応』の因子に関しては、必ずしも納得のいく関係性はみられなかった。これについては、今後、測定項目の内容や測定方法のみなおしを含めて、改善策を検討していく必要があるだろう。

引用文献

- Achenbach, T. M. (1991) Integrative Guide to the 1991 CBCL/4-18, YSR, and TRF Profiles. Burlington, VT : University of Vermont, Department of Psychology
- Chamberlain, P., & Reid, J. B. (1987) Parent observation and report of child symptoms. *Behavioral Assessment*, 9, 97-109.
- Conners, C. K. (1994) The Conners Rating Scales : use in clinical assessment, treatment planning and research. In : *Use of Psychological Testing for Treatment Planning and Outcome Assessment* (ed. M. Maruish), 467-497. Erlbaum, Hillsdale, NJ, USA.
- Chamberlain P., Price J., Leve L. D., Laurent H., Landsverk J. A. & Reid J. B (2008) Prevention of Behavior Problems for Children in Foster Care : Outcomes and Mediation Effects. *Prevention Science* 9, 17-27.
- Dupaul G. J., Power T. J., Anastopoulos A. D., Reid R (1998) ADHD Rating Scale IV Checklists, norms, and clinical interpretation. The Guilford Press, New York.
- Eyberg S. M. (1980) Eyberg Child Behaviour Inventory. *Journal of Clinical Child Psychology*, 9, 27.
- Goodman, R. (1997) The Strengths and Difficulties Questionnaire : a research note. *Journal of Child Psychology, Psychiatry, and Allied Disciplines*, 38, 581-586.
- Hood K. K. and Eyberg S. M. (2003) Outcomes of Parent-Child Interaction Therapy : Mothers' Reports of Maintenance Three to Six Years After Treatment *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, 32(3), 419-429.
- Jones K., Daley D., Hutchings J., Bywater T. and Eames C. (2007) Efficacy of the Incredible Years Basic parent training programme as an early intervention for children with conduct problems and *ADHD Child : Care, Health and Development*. 33(6), 749-756.
- 中台佐喜子・金山元春 (2004) 母親の養育態度が幼児の社会的スキルに及ぼす影響 家庭教育研究所紀要 26, 61-66.
- Sanders, M. R., & Dadds, M. R. (1982) The effects of planned activities and child management procedures in parent training : An analysis of setting generality. *Behavior Therapy*, 13, 452-461.
- 立元真 (2005) 幼児の親に対する予防的な養育スキル・愛着関係改善トレーニング介入 平成15年度～16年度科学研究費補助金(基盤C) 研究成果報告書
- Turner K. M. T and Sanders M. R. (2006) Help When It's Needed First : A Controlled Evaluation of Brief, Preventive Behavioral Family Intervention in a Primary Care Setting. *Behavior Therapy*, 37, 131-142.